

慣習よさようなら?!

友引に葬儀「気にしない」

札幌市山口斎場(手稲区)が昨年十二月から、冬季限定で「友引」も開いたところ、一日平均二十件近い利用があり、関係者を驚かせている。一時期開場していた約三十年前の十倍に増え、葬祭業者は「休める日が少なくなった」。凶事を誘うといわれる友引だが、時代が変わり、迷信や慣習を気にしない市民が確実に増えているようだ。

友引だった十四日の山口斎場。冷たい小雨が降る中、喪服の遺族を乗せた葬祭業者のバスが、頻繁に行き交っていた。

「開いていて良かった」。六十六歳の父親を亡くした豊平区の男性(〇)は友引を気にするより、「早く送り出してあげたい」という気持ちの方が先だった」と明かす。

山口斎場の「友引開場」は、札幌市のもう一方所の火葬場である里塚斎場(清田区)が昨年四月から二年間、改修工事で使えなくなっているため。冬季は利用が約一割増えることから、混雑緩和のため三月末までの限定開場に踏み切った。市によると、二月末までの友引の利用は一日平均一九・四件。友引以外の同四七・五件の半数以下だが、

火葬場利用 平均20件

限定開場の札幌・山口斎場

「た」とこぼす。もちろん、友引の葬儀への抵抗感が全くなくなったわけではない。昨年四月、友引を避けるため、夫の告別式を一日延ばした南区の主婦(モ)は「もし親族に不幸が続いたら、申し開きできませんから」と振り返る。

札幌葬祭業組合の中島浩盟(浩)幹事長は「利用は一けたと思っていたのに」と驚きを隠さない。

道内では函館市の火葬場が友引でも受け付けているが、函館では火葬してから葬儀を行うのが一般的で、

30年前の10倍に

友引に火葬しても、葬儀は別の日の場合が多い。特異なケースといえる函館を除くと、友引開場は道内ではほとんど例がない。

札幌市もかつて、友引に火葬場を開いていたが、一九七八年から八二年まで五年間の一日平均の利用は一・九件で、友引以外の日の

7・2%。八四年に里塚斎場ができてからは、友引を

休みにしてきた。友引の利用増について、慣習や習俗にとられない葬儀を旨として活動するNPO法人「葬送を考える市民の会(札幌)」の沢知里代表は「友引で葬儀が一日延びると、遺体を安置する会館の費用や遠方の参列者の宿泊費がかさむし、遺族の疲労もたまると話すが、友引が増えているのは理解できる」と分析。「びっくり」というより「やっぱり」という感じだと話す。市内のある葬祭業者は「時代が変わったということ。でも、大手はいいかもしれないが、うちのようない、今後は、市に交互開場を求める要望書を提出する。」

と説明。里塚斎場が使えるようになれば、「友引に開場する必要はない」と話す。ただ、今回の開場で友引でも一定の市民ニーズがあることが明らかになった。沢代表は「二場体制になったら、交互に友引に開けばいい。市民の選択肢をなくしてしまうのは問題」と話し、今後、市に交互開場を求める要望書を提出する。



友引だった14日、山口斎場を利用する遺族たち。葬祭業者のバスが次々と乗りつけ、25件の利用があった

